

「集団」と「社会的な人格発達」

立命館大学 中村隆一

加藤直樹先生のごことは、障害児教育にかかわる授業を非常勤で担当しておられたので学生時代から存じていた。ただその授業には卒業論文のデータを保育所でとっていたので、ほとんど出席せず、期末のレポートを提出しただけで単位をいただいたような状況で、学生時代には加藤先生とことばを交わすこともなかった。

大津市役所に就職後、夏ごろから全障研滋賀支部の事務局会議に顔を出すようになって、開口一番「あんな僕の授業とってたはずやな」とニヤニヤしながら声をかけていただいたのが、最初の私の加藤直樹体験だった。

すでに加藤先生は、全国的に多方面で活躍しておられたが、私にとっては、身近な「発達相談の先輩」であった。私が結婚して間もないころ、わが家で全障研の会議をしたときに、定刻前から到着されて「僕の蕎麦をみんなにご馳走してあげるわ」と台所に立たれた。あわてて材料を買うために夫婦で市場を走り回ったことが懐かしい。これは、年齢は13歳もちがうが、その私を仲間と思わせる加藤先生流の組織者としての配慮だったのかもしれない。

だから、率直な批判も受けた。加

藤先生の中村評は、「社会性がない」。これは晩年まで続いた。その背景には、理屈だけで暴走する頭でっかちの私に対する「正しいことだけが正義か？」という問いであったように思う。

加藤先生は、「社会的な人格発達」と「集団」に関心を寄せており、それをまず実践現場における職員の問題として取りあげてこられた。なによりも「集団」は、さまざまな問題をはらむ職場にあって、それを変革するための運動のより所であった。だから、「いつまでも野党根性をひきずってしちゃだめだ」というのも口癖だったし、運動は「敵をへらして、味方につける知恵が必要だ」と何度も話しておられた。それは、おそらく社会的な人格発達という問題意識の延長線上のお話であった。

「集団」にかかわっては、集団を無前提に重視するのではなく、構成員の内発性から論じようとしておられたと思う。たとえば集団を評価する場合に、そこに各職員の出番があるかどうか、をたびたび問うておられた。たとえば、ある条件のもとで人が集められる。その場合に、出番とは、そこで役割を分担されるだけではなく、構成員が見せようとする



加藤直樹さん

かとう なおき / 1941年～2015年。
1964年京都大学文学部卒業。全国障害者問題研究会常任全国委員や出版部経営委員を歴任。人間発達研究所2代所長。立命館大学名誉教授。編著書に『障害児の心理学』（共著、青木書店）『障害の早期診断と発達診断』『障害者の自立と発達保障』（全国障害者問題研究会）など。

「顔」を引き出すということだろう。矛盾をかかえる職場では、まずリーダーに対する不満がうずまく。そのリーダーに対してもいきなり批判をするのではなく、リーダーらしく振る舞えるように周囲がどう支えるのかをまず問題にしておられた。

このように、加藤先生は、びわこ学園で重症心身障害児の発達相談から職業生活をはじめられ、滋賀大学、立命館大学にと職場をうつり、9・10歳の節目研究や青年・成人期障害者の発達と展開され、成人期の人格発達に常に実践的に問題に向き合ってこられた。

(なかむら りゅういち)